

# 書評

## 土屋とく



「幼児心理学」

山下俊郎著 朝倉書店

感動を覚えるのは私ひとりではないだろう。

赤い表紙にくつきりと刻まれた白文字。こどもに関心をいだく者が一度は手にし、あるいは本棚に備えて問題を感ずるたびに保育の手引きとしてひもといってきた貴重な本の一つである。

初版は昭和十三年とのことであるから実に三十数年の長きにわたって乳幼児理解に貢献してきたことになる。この間の時代の流れはそのまま日本の保育界の歴史を物語るが、今日のような発展を目的あたりにする時、当時荒野にまかれた「一粒の麦」は確実な「みのり」を豊かに示してきているのだと

しかし学問の進歩や保育知識の普及は、本自体の成長をも迫ってくることになる。心理学の新しい資料が提供され、対象たる子どももまた発達の歩みを早めたり質的な変化を見せる面も出てくるからである。

何度か改訂を重ねてきたこの本も新たな要請のもとに再び書き改められたわけであるが、著者の健康がすぐれず部分的な改訂にとどまったのは残念とはいえ、言語、数、思考、テスト（特に人格検査）等近来の動きは確実に示されているし、嫉妬の取扱いにあたったかい配慮が加えられているのも、一貫

して流れるこどもへの愛情が感じられてうれしい。

「あらたな生命が与えられた「幼児心理学」が母親、保育者の道標として今後もゆく道をさし示してくれることを信じる。

「保育者への一つの指針」

金沢、平井、乾、

八杉、城戸（共著）

フレール新書 2

「保育の手帖」（昭和四十四年四月）同四十六年三月）にのせられた同名の小論を一冊にまとめたものです。に読まれた方も多いと思うが、「カリキュラムの基礎」「教育制度の再編成」「保育者同志の連帯感」について各先生の発言はそれぞれ現場の保育者に対するあたたかい助言やすぐれた卓見に満ちている。

たとえば、人間のこころと愛情・問題の子をとおして現実の子どもをもう

一度見直す必要を・科学者としての子どもの見方への反省を・長い教育心理

の研究と実践からの意見を・仲間づくりの必要性と勇気づけを・等々一つ一つが読む者の心の中に光を投げかける。

毎日の保育活動の中で疑問に思い、ひとり心の中で悩みながらも現実の制約と労働の厳しさについて流されて、深く考えることをあきらめてしまいがちな保育者に反省と確信を与え、迷路の中での進むべき方向の手がかりをしるしている。

こうした指針をふまえて、保育者自身が冷静な目とするどい判断力をもって自らの道を選び、ひとりひとり、地についた歩みをすすめてゆくことが最も必要なことなのだと思う。著者もそれを望み助言を惜しまないのだと思うゆえに……。

## 「0歳児集団の発見」

原田嘉美子著 風媒社

0歳児の保育がむずかしいものであることは誰も認めるところであろう。初めて母親になった者は、特にこの新しい経験に喜びと共に多くの不安を感じながら夢中で毎日をごすこととなる。しかしこの若い母親の中には職業をもち妻と母を両立させていこうとする人たちも多いのだ。

産休明けつまり生後四十三日目から職場に復帰するために、はち切れるようなお乳をおさえて子どもを保育園へ預けにいく。そういう人々が安心して働ける、そして子どもたちが健やかに成長できるような理想的な保育園が数多くあったらという声は各地に満ちている。この本は原田さんという意欲に満ちた保育者が0才児の集団保育を実践した共同保育所からの報告である。

現実の切実な要求と、保育者のもつ熱意とによって行なわれる活動は、乳児保育の限界をつき破るだけのものをもっているようである。

長い経験のもたらす判断力と、見通しの確かさをもつ者が責任をもって周到な計画を立て行き届いた管理のもとで年齢の近い子ども同志刺戟を与え合いながら保育をしていった時、核家族化の進んだ分断された家庭での保育では得られない利点があるのではないかと感じさせられる。

既存の心理学書にあきたらなさを感じる筆者が、0才児にも、月齢に応じた目標を立て、正しい刺戟→発達の助長、を積極的にすすめていこうとしている。この努力に期待する。

共同保育所の運営のむずかしさもさることながら、問題をつきつめてゆけばゆくほど現代のもつ各種の矛盾を認識させられる。